

# 説一切有部における禪定體驗の記号言語化について

佐野靖夫

## I 問題の所在

説一切有部の言語表象は、三世に実有するとされる法の自性(名身(nāmakāya)・句身(padakāya)・文身(vyājanakāya))を数え、またパーリ語によるSabbatthavādinが「一切の認識は必ず対象を持つとして言語によって表現する部派」なる意味をもつとされることなどからも、そこには一見記述不可能と思える事象までも精力的に説示しようとする試みがみられる。もちろんこれらは、現代における実証主義あるいは形式論理学の手法とは、その方法論と目的において単純な比較を拒むものであることは確かである。本論稿はそれらをふまえながらも、禪定體驗という修道上最もポピュラーな実践手法において、説一切有部がいつたいどのような論理構造を駆使し、その主観的世界観を客観として表象しようとしたかを考察するものである。そこでテキストとしてより多くの記述を有することを理由に、特に、『大毘婆沙論』を中心にみて

いくこととする。

## II

はじめに言語化ということについて、説一切有部は名身(単語)・句身(文章)・文身(文字)を心不相応行法の所撰の三種とたてる。これはアビダルマという思考表象の特性から必然的に導き出されたものであり、アーガマという釈尊の言説の解釈学であることから、釈尊の言説の絶対性を位置づけたものとして捉えることができる。<sup>①</sup>その中で名身等は、有情数・無執受・等流・業の増上果・無記であり、能説者がこれら名身等を成就するとされる。また、名は非色であり、四蘊であり、義は不可説とされる。その名称に、功德名・生類名・時分名・随欲名・業生名・標相名・仮想名・随用名・彼益名・從略名・生名・作名・有相名・無相名・共名・不共名・定名・不定名という性質があり、さらに説問については、「義利を引かず、善法を引かず、梵行に順せず、覺慧を発せず、涅槃

を得」ない問いは捨置すべきとして、黙然として無記の答えありとした<sup>(2)</sup>。このように説一切有部の言語概念が述べられるわけであるが、そこにおいて、これらの自性が過去・現在・未来という三世に実有することによって、客観的対象として把握し得るものとしてあることを示唆するのである。

### III

説一切有部は定の名目に、等引 (samāhita) ・ 等持 (samādhī) ・ 等至 (samāpatti) ・ 静慮 (dhyāna) ・ 心一境性 (cittakāraṇa) ・ 止 (samāhā) ・ 現法樂住 (dīśadharmasukhavihāra) 等の諸種を挙げるのは知られている。そして欲界・色界・無色界という三界の上二界が、八等至という、初静慮・第二静慮・第三静慮・第四静慮・空無辺處 (akāśānantyaśyātana) ・ 識無辺處 (vijñānaṅtīyātana) ・ 無所有處 (ākāśicanyāyatana) ・ 非想非非想處 (nāivasanñhātasamjñāyatana) という禪定体験の深化による世界観をなすものとされている。これらの世界観はもともとインドオソドツクスなもので、仏教はそれを下敷にしているものであるが、より仏教において特徴的なものは、四静慮論と無想定及び滅尽定についての論及である。これらを説明するために取られた手法が諸門分別ならびに四句分別、また一行問答、歴六問答、大小七句問答と呼ばれるものである。

諸門分別のより完成した手法は『俱舍論』においてみるこ

説一切有部における禪定体験の記号言語化について (佐野)

とができるが、例えば『大毘婆沙論』において除色想観法を以下のように説明する<sup>(3)</sup>。ある比丘がいて、このような勝解をなす。「我が此の身は將に死せんとす。已に死し、將に輿に上らんとす。已に輿に上り、將に塚間に往かんとす。已に塚間に往き、將に地に置かれんとす。已に地に置かれ、將に種々の虫のために食はれんとす。已に種々の虫のために食はる。此の種々の虫、將に散せんとす。已に散ず。」という観をおこし、「彼れ最後において自身を見ず、また、虫をも見ず」という除色想をなすところにおいて、次のように分別する。

除色想の自體はなにか。慧を自體となす。名を釈せば、能く諸の積集の色を遣りて現前せざらしむるによる。界をいへば、色界。地をいへば、第四静慮。所依をいへば、欲界身に依る。行相をいへば、不明了の行相。所縁をいへば、欲界を縁す。念住をいへば、身念住。智をいへば、世俗智。等持をいへば、等持と俱に非ず。根をいへば、捨根と相應す。世をいへば、三世に通ず。善・不善・無記をいへば、善にして三種を縁す。三界繫・不繫をいへば、色界繫にして欲界繫を縁す。学・無学・非学非無学なりやをいへば、非学非無学にして非学非無学を縁す。見所断・修所断・不断なりやをいへば、修所断にして修所断を縁す。自身・他身・非身を縁するやをいへば、三説あり。名を縁するや義を縁するやをいへば、義のみを縁す。加行得・離染得なりやをいへば、加行得なり。起る處をいへば、欲界にありて、色・無色界には非ず。——とい

説一切有部における禪定体験の記号言語化について（佐野）

うものである。

いっぽう四句分別とは、より論理的に数学の集合論と同じもので、Aという集合、Bという集合、AかつBという集合、AにもあらずBにもあらずという集合の四句を作つて論旨を明らかにするものであり、以下、一行問答等についても同様である。

#### IV まとめ

禪定体験の記号言語化について、説一切有部は後の大乘唯識思想のように心識の假法という主観的解釈をなさず、一切をあくまで実有する境（対象）をもつ客観的事物として取り扱おうとする。そこにおいて禪定体験は世俗の日常体験と同様、諸行無常の五蘊もしくは四蘊の和合として存在するものである。それは説一切有部において、自明の理として容認される。なぜならそれは、釈尊の言説（アীগマ）のなかに名・文身として確かに実有するものだからである。その立場において問題とされるのは、説一切有部の展開する緻密な網の目のようなアビダルマに、いかにそれが適合するか否かである。諸門分別の設問形態が、さとりへの階梯のどの段階のステージにあるものであるかということの問題にしているのは特徴的である。また、四句分別等の論理形式とともに、捨置すべき黙然としての無記の答えを認めたことは、アビダル

マ理解の上で特に重要だといえる。それはともすれば、アビダルマは形骸化した煩瑣で空虚な議論の積み重ねであるといった評があるなかで、アビダルマは形而上学的遊戯であるのではなく、実のところあくまで仏教という宗教的目的に貫かれている手法であることが看取できるからである。

1 「夫利他者、必於名身句身文身、皆得善巧。以善巧故。能為他説蘊界處等。令得涅槃究竟饒益。」『大毘婆沙論』T. vol. 27, p. 70a]

2 *ibid.* T. vol. 27, pp. 71c-77a

3 *ibid.* T. vol. 27, pp. 704c-706b

〈キーワード〉 説一切有部、禪定、諸門分別

（立正大学大学院）